

モラルサイエンス研究会（令和2年6月10日）発表要旨

AI時代の分別と無分別

生命環境研究室
教授 犬飼 孝夫

人工知能（AI）は、極論すれば0と1、オフとオンという二進法で成り立っている。その思想的基盤はフランスの哲学者ルネ・デカルトやイギリスの哲学者フランシス・ベーコンがもたらした、主体としての人間と客体としての自然とを分けて考える二元論的思考である。こうした思考は自然を分解・分析・分類し、科学技術の発展をもたらした。だが同時に自然は人間に支配され搾取される資源となった。今やこうした近代科学のパラダイムは超克され、新たな哲学が打ち立てられるべきではないのか。その際、仏教における無分別智に注目すべきである。それは、物質と精神、心と身体、自然と人間といった二項対立的な見方を超越し、それらを統合的にとらえ、自己と他者、自己と世界、自己と自然とを融合的、一体的なものとして直観的にとらえる智のあり方である。分断の傾向を強める現代世界において、無分別智に基づく新たなパラダイムの構築が求められている。